



みなと

みなと 56号 2018年12月1日
兵庫県声の図書赤十字奉仕団
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1-4-5
日本赤十字社兵庫県支部内
(Tel) 078-241-9889 (Fax) 078-241-6990
代表者 田辺依子
編集者 神坂順子

平成30年度 第29回交流会

2018年11月23日(金)



リスナー代表 中原真理子さん



司会 与茂田恭子

プログラム

- 12:00 開会挨拶 兵庫県声の図書赤十字奉仕団委員長 田辺依子
来賓挨拶 日本赤十字社兵庫県支部奉仕課 平野浩美課長
来賓紹介 平野浩美課長 岡本 昇係長 青少年赤十字賛助奉仕団 中島健治委員長
リスナー代表挨拶 中原真理子さん
リスナー紹介
- 12:20 昼食
- 13:10 コンサート 出演 コーラスアンサンブル びおん
♪「愛するうた」(女声合唱曲集)より
♪みんなで歌いましょう! 「もみじ」「上を向いて歩こう」「ドレミのうた」
♪青春のメロディー「春よ、来い」「この広い野原いっぱい」「いい日旅立ち」他
- 14:00 歓談 見直す会からのお知らせ&交流の時間
- 14:50 全員合唱 ♪今日の日はさようなら
閉会挨拶 交流会実行委員長 淡路忠義
- 15:00 閉会



平成 30 年度第 29 回交流会を終えて 平成 30 年 11 月 23 日(金) 秋晴

☆参加者合計 179 名

(リスナー56名 同行者 50名 団員 63名 来賓 3名 イベント 7名)

およそ半年にかけて準備してまいりました交流会は、開会の幕が開くとアツという間に終わった！という印象です。まるでお祭りの花火のようでした。

委員長を務めるグループは準備作業が多く結構大変、でも山を越えると、他のグループは当日に向け着実に動いてくれているんだ、とわかり安心して開幕を楽しみにしておりました。

平野課長はじめ奉仕課の皆様は気持ちよく、フットワーク良く助けてくださいました。細かいお願いから、会場設営と最後の片付けまで、私たちの気づかないこともやってくさっていただろう、と思います。

1. 田辺委員長の開会挨拶でスタート。
 2. 来賓は平野課長、岡本係長、中島健治様 代表して平野課長よりご挨拶をいただきました。
 3. リスナー代表挨拶は中原真理子様です。いつも熱心にお聴きになり丁寧な感想を送ってくださいます。長く続けてほしいとのお言葉は団員の励みになりました。
- * 昼食は、仕出し屋あさ多のお弁当と、もみじ饅頭、農家直送みかんです。昨年より 18 名増で担当者はご苦労でしたが、とても美味しかった！と満足していただいたようです。



* イベントはコーラスアンサンブルびおん様 まずお1人ずつ自己紹介でほっこり笑えました。歌声は澄み切って心地よく、リスナーの皆さんも静かに耳を傾け、ブラボーの声も上がりました。びおんさんは実行委員会の要望を入れて、みんなで歌える曲を考えてプログラム、歌詞まで準備してくださいました。土岐さんの司会と歌の紹介は、いい雰囲気でも聞き手によく伝わりました。また、このイベントは点字班の皆様にも大変お世話になりました。ありがとうございます。

* 歓談の時間は、皆様は一年ぶりのお友達とおしゃべりを楽しんだり、団員から PHP のアンケートやリスナー交流会のお誘いもして、ご感想やご希望なども多数出してくださいました。喜んでいるとのお言葉、辛口のお言葉もありますが、どなたも声の図書を応援してくださいます気持ちがあり嬉しく思います。

☆ 平野課長から「100年続けてください」というお言葉をいただきました。

『声の図書奉仕団』は今年 55 周年。これからも日本赤十字社兵庫県支部のボランティアであることを誇りとして、45年つないで行けますように。

☆ このたび奉仕課の皆様、団員の皆様にも大変お世話になりました。実行委員の皆様ありがとうございました。あかりの会を応援していただき感謝申し上げます。

実行委員 上原恵子 (あかりの会)

デイジー班



「初心にかえって」

久しぶりにデイジー受け入れをしました。以前はコンスタントに参加していたので、まあ大丈夫かなと思っていました。それでも他のグループの方達と確認しながら、緑の袋からCDを取り出し、中に手紙が入っていないかを見、宛名カードと重ね等、作業を進めていく中で、ア行からヤ行までそれぞれの枚数を数えるとか、当月数と他の月数を分けて数えるとか「ああ、そうだったな」と、少しずつ流れを思い出しました。

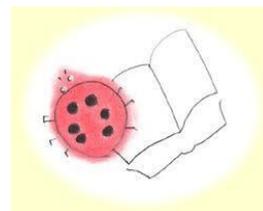
現在、あかりの会・青年・はあもにいの3グループが受け入れ作業に関わっていますが、複数の目で確認することは、ミスを減らすためにも大切なことです。時には、ベテランの人と新人とで一緒に行くこともあります。新人の方は作業を覚えるのに必死ですが、ベテランの人は、教えることでこれまでの手順を確認することができます。慣れてくると、どうしても流れ作業になってしまって、袋の中の手紙を見落としたり、受け入れ日の記入を忘れたりといったことが出てきます。しっかり受け入れ作業を行いボタンタッチすれば、発送グループは安心して次の作業に取り組むことができます。先日も、CDケースラベル、「ニッセキ コエノ トシヨ」と「10月号」のラベルが重なるように貼ってあるものが見つかりました。私が声の図書奉仕団に入団したての頃は、まだ自分のグループのカセットテープのみの受け入れでした。その時に先輩に言われたことは、「リスナーの方々は、点字ラベルを触ってどの図書かを確認するのだから、分かり易い位置できれいに貼りなさい」ということでした。今でも、私の頭の中に叩き込まれています。

デイジー受け入れが始まってからこれまで、試行錯誤を繰り返しながら、今の形に落ち着いていますが、これからもよりよい受け入れ方法を模索し、初心を忘れず受け入れを行っていきたいと思います。

受け入れグループ 久保田加奈女（はあもにい）



点字班



いつもお世話になっております。点字班の活動を報告いたします。10月に明石市立王子小学校・11月に明石市立花園小学校へ点字講習に行っていました。また交流会のプログラムや歌詞そしてりぼんの付いた可愛いメッセージカードも作成しました。

今回は点字の歴史を簡単に紹介いたします。

19世紀はじめ頃フランスの、もと軍人シャルル・バルビエが軍隊用の通信暗号や速記符号として考案した12点式点字を盲学校に持ち込みます。

その生徒の中にルイ・ブライユ（1809－1852）がいました。縦6点・横2列のバルビエの点字は、指で読むには長すぎることに気づきます。そこでブライユは研究と改良を重ね、縦3点・横2列の6点式点字を考案しました。アルファベットや数字などの基本を完成させたのは1825年、16歳の時でした。フランスで公式の文字として採用されたのは、ブライユが亡くなってから2年後の1854年でした。6点式点字は次第に欧米各国へ普及してゆき、今では世界中で用いられています。

11月1日は「日本点字制定記念日」

「日本点字の父」は石川倉次

日本でブライユの点字を用いたのは1887（明治20）年、東京盲啞学校（現・筑波大学附属視覚特別支援学校）教員の小西信八（こにし のぶはち）です。小西は同校教員の石川倉次（いしかわ くらじ 1859－1944）にブライユ点字の日本語への翻案を依頼しました。教員や生徒とともに研究が進められ、三つの案について「点字選定会」が開かれました。

1890（明治23）年11月1日に50音の構成が最も合理的な、石川倉次の案に決まりました。この11月1日は現在、「日本点字制定記念日」とされています。また、石川倉次は「日本点字の父」とたたえられています。その後、石川は1898（明治31）年に拗音点字を発表しました。

この拗音点字を含めた日本語の点字が1901（明治34）年の官報に「日本訓盲点字」として発表されました。そして日本の盲人用文字として公認されたのです。

点字班の活動日は毎月第2火曜日です。10時から3時まで行いますので見学に来られませんか。お待ちしております。

ことばの花束

門田真弓美

朗読・音訳を見直す会

何十年振りかに「みなと」へ投稿である。右の写真をご覧になってお判りの方がいたら大変嬉しいが、いかがだろうか。

「みなと」創刊時の表紙で、創刊時は青年グループが担当し、黄ばんだ紙にガリ版印刷、彩色は印刷後の手書きであった。ネーミングは『港神戸』から。題字は下山手通の支部4階ボラティア室で机を並べて一緒に活動していた青年奉仕団のメンバーが書いてくれたもの。右下の船に名前が読み取れる。

当時はオープンリールでの録音、その後にはカセットテープも加わったが、読み方が引っかけるとやり直しになる。外の音を気にしながらの録音、家では家族が寝静まってからの作業であった。

「みなと」担当も時には持ち帰ることがあり、こちらも夜中に“ガリガリ”とガリ板と鉄筆を相手に慣れない作業であり、修正インキは必需品であった。

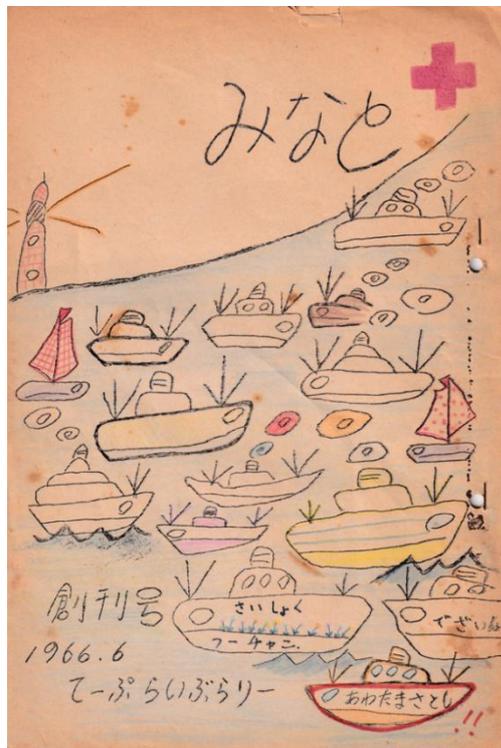
(学生達はいつ勉強していたのだろうか。)

2年前、定年退職後に出戻ると録音方法の進化？に嬉しくなり、活動を開始した。アナログ録音とデジタル録音の差は大きく、住まいのある伊丹では飛行機の音で何度も録音を止めるが、すぐ続けて録音できることはデジタルのメリットである。何よりも日中に録音でき、睡眠時間に影響しないのが一番である。

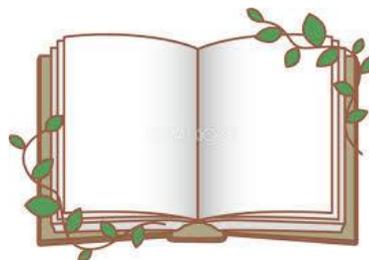
「朗読・音訳を見直す会」のマニュアル作成等で読み方の標準化がなされ、読みやすくなっていった。視覚障害者に寄り添いながら、心地よく聞いていただけるより良いものを目指している。「朗読」と「音訳」の狭間を取り上げる活動内容に時間の流れが感じられ、教わることが多い。アクセント辞典を片手に録音したが、アクセントや口中音が気になり声帯の老化を痛感して、自身の読みに失笑した。メンバーの方々から多くの刺激を受け、『自分にできることは何か？』と考えながら少しでも前向きに活動できればと思っている。

「朗読・音訳を見直す会」では、[録音図書製作マニュアル] <第3版>見直し改訂を2019年6月1日発行予定で作業している。もう少しお待ち頂きたい。

中島 久美子 (青年)



単行図書検討会



今年度4～10月に完成した単行図書は12作品に上ります。例年に比べ、快調なペースで進んでいます。これもひとえに、単行図書製作に携わってくださっている皆さまのご尽力のお蔭と心よりお礼申し上げます。

現在、単行図書に関する最大の課題は、読み手が少ないことです。そのため、限られた方々にご負担をおかけして心苦しく思っております。興味はあるが何となく尻込みをしている方もいらっしゃると思います。比較的気楽なプライベート図書（リスナーからの録音希望図書で声奉の蔵書にはしない本）や、数人で分担して読める短編集などから始めることをお勧めします。まずはチャレンジしてみてください。そうすれば、単行図書を読む醍醐味や面白さが分かるのではないのでしょうか。

校正に関する質問で多いのは、口中音はどの程度許容されるかということです。口中音、その他ノイズがない録音図書が望ましいことは勿論ですが、体質的なこともあり、悩ましい問題です。日本ライトハウス情報文化センター発行の「ろくおん通信第230号（2018年10月）」に、「極度に神経質になる必要はないが、読書に集中できなくなるほど気になる音があれば指摘してください」という考えが示されていて、声奉の指針を決める際の参考になると思います。ただし、録音の際には、口中音を出来るだけ減らす努力は必要だと思っています。

校正を受けての訂正作業についてですが、録音者は、校正者の指摘に納得して訂正してください。指摘をパスする時は、理由を校正表に書いてください。お互いが納得して、作業を進めていくことが大事だと思います。どうしても意見が合わない場合は、第三者に相談するか、録音者が決めればよいと思います。

最後に、校正をされていて気がついた漢字の読みを、いくつか挙げたいと思います。

語句	読み	読み	根拠
愛想	○あいそ	△あいそう	㊦→あいそ、㊧㊦あいそに同じ
谷底	○たにそこ	×たにぞこ	
停車場	○ていしゃじょう	△ていしゃば	㊦→ていしゃじょう ㊧㊦ていしゃじょうに同じ
若い衆	○わかいしゅ	△わかいしゅう	㊦わかいしゅうとも
悪口	○わるくち	△わるぐち	㊦㊧㊦わるぐちとも

*○印は正しい読み、△印は間違いではないが○印のほうが望ましい、×印は間違い

*㊦広辞苑、㊧大辞林、㊦日本国語大辞典

(こすもす 池内早苗)

グループ紹介 「青年グループ」

「青年グループ」の青年は、成年ではなく青年です。このグループ名について、少々疑問に思っている方もおられるのではないのでしょうか。私も入団当初は、「どうして青年？」と思いました。その頃、もう既にメンバーの平均年齢が少し高くなっていましたから。そこで、このグループの歴史を辿って名前の由来をひもといてみることから始めようと思います。

1963年6月1日に、「昼のグループ」「夜のグループ」の2グループで構成された日本赤十字社兵庫県支部テープライブラリー（後に日本赤十字社兵庫県支部声の図書赤十字奉仕団と改称）が発足しました。そして、1966年4月1日に「夜のグループ」は「青年グループ」と改称し、同年6月1日に機関紙『みなと』が「青年グループ」を中心に創刊されたそうです。

当時、夜のグループは社会人と学生で構成されており、年齢層も20代から30代が中心であったことから、正真正銘「青年グループ」としてスタートしたというわけです。

その後、年数を経て主婦がメンバーの大半を占めるようになってから、活動時間を夜から昼間に変更し今日に至っています。活動内容は、毎月「やまなみ」と「あじさい」の発行、『PHP』担当箇所の録音、そしてデイジー編集・発送作業や受け入れ作業にもメンバーが参加しています。また、原則として、第一水曜日に例会、第二水曜日に『PHP』担当箇所の朗読勉強会、第三水曜日に「あじさい」の朗読勉強会をしており、勉強会では、発足当初から参加されている小石則子先生にご指導いただいています。

現在発行している「やまなみ」は、1965年9月1日に「月刊テープ“やまなみ”」として当時の「夜のグループ」が創刊し、「あじさい」は1994年6月19日に「青年グループ」が創刊したものです。「やまなみ」が創刊から50年以上続いていると思うと、その収録に参加している一員として感慨深いものがあります。特に「やまなみ」は、参加メンバーによる旬の話題やプログラムに関する生の会話を交えながら進行・収録するという形式になっていて、青年グループの看板番組といえます。

現在の活動メンバーは、21名。発足から55年経って、構成メンバーの顔ぶれも年齢も変化していますが、精神は今も変わらず「青年」のままで活動しています。

できる限り、末永く続けていきたいと思っていますので、この先もあたたかく見守ってください。

谷下京子



リスナーだより



中原真理子さん PHP10月号を聴いて
生きるや、特集コーナーや特別企画や
心に残る父のこと母のこと、未来への道しるべ、
ヒューマンドキュメント、
あの日のはやり歌、東北レポート、
談話室や私の信条、松下幸之助思いやりの心、
心にきくことば、心を寄せあたたかい社会
など、多彩な内容、盛り沢山ですね。
ダジャレ工房は面白かったのですがなくなって
残念です。できたら、また載せてほしいなと願
っています。今後とも期待しています。

山田富恵さん H.30.9.18

8月からお世話になり、聞かせていただい
ております。送っていただいたCDの中
で、正しい睡眠のとり方を教えていただい
て本当によかったです。今後とも楽しみに
聞かせていただきます。

原田喜種さん H.30.10.7

守り人シリーズ4「虚空の旅人」
やはり素晴らしい内容でした。
そして、朗読の方の声が素晴らし
くわかりやすく、聴く者の心に、
その時々的情景がうかんでいま
す。
とても楽しく、あっというまに聞
かせていただきました。



香山良樹さん H.30.11.2

花時計10月号を聴いて
歌にまつわるお話、またお願いします。
珍しい名前の地名や町の名前、たいへん面
白かったです。また、雑学の本、紹介して
ください。また。まとまったもの、デイ
ジーになるよう希望します。
頭の良い探偵物語、デイジーになるよう希
望します。
更に秋が深まって、食べ物も美味しくなっ
てきました。秋を楽しみましょう。

吉田憲子さん H.30.10.25

いつも イイ本をありがとうございます
す。
「終電の神様」ありがちな～とか、
私ならこんな時、どうなるかな～と、
ひとつひとつ楽しみながら聞かせてい
ただきました。読み手の方も、ゆっく
りした速度で、すごく聞きやすかった
し、楽しかった。ありがとう。

H.30.11.22

阿川佐和子さんの「空耳アワワ」
すごくおもしろく、ひとり声を出し
笑ってしまいました。
特にふくろの話の時は、私と同じだ
と思っています。うまく言えないけど、
女はほとんどそうですね。
「原 節子の真実」も、楽しく聞かせ
てもらいました。

花時計 プログラム



花時計 6月号 はあもにい

1. 光と彩溢れるオランダの旅
2. 今話題の「ゴッホのクフのひまわり」を訪ねて
3. Marcy の Music Cafe ジューンブライド
4. 淡路島こぼれ話「晴から夏へ」
5. お料理 新玉ねぎの丸ごとスープ煮
6. お便り紹介

花時計 7月号 こすもす

1. 「子午線をたどる 時の道」
2. 「アイスクリームに 絶品桃ソース・夏の疲れに甘酒」
3. 「金金というやつにろくなやつはいない」(佐藤愛子著)
4. 「本当の意味での挑戦者」田中将大
5. 果樹園の宝石「サクランボ」
6. 朗読劇 小泉八雲「忠五郎の話」
7. おたよりコーナー

花時計 8月号 あかりの会

1. 「存在感」
2. 「がきのめし」
3. NHKハート展から
4. 大相撲 知ればしるほど
5. 雑学あれこれ

花時計 9月号 神戸YWCA

1. タイ旅行記
2. 下肥の話
3. 神戸、書いてどうなるのか
4. 作家の口福 レタスのしゃぶしゃぶ
5. 京都ものがたりのみち
6. リスナーさんからのお便り

花時計 10月号 ことばの花束

1. 枕詞は「さっちゃん」
2. 生卵と生魚 安全に味わうために
3. 珍しい地名を楽しむ
4. 「わたし遺産」第5回大賞受賞作
5. やってみましょう お口のケア
6. 西郷どんを生んだ鹿児島の魅力・続編一向田邦子エッセーより「薩摩揚」
7. お便りとお知らせ

花時計 11月号 ともしび

1. インタビュー「アドラー心理学のエッセンス」
2. 「鐘つけば、柿くへば秋」
3. 「絶滅寸前季語辞典」より
4. 「雲の上の生きる」歌人 川野里子
5. 「目からうろこ 魚の基本」